

令和三年五月一日発行
通巻一六一号(毎月一回一日発行)

京鹿子

A traditional Japanese ink and wash illustration of a wisteria branch. The branch enters from the left, curving upwards and then downwards. It is adorned with several long, drooping racemes of small, light-colored flowers. The leaves are finely detailed with green ink wash, showing their characteristic pinnate structure. The background is a plain, light-colored paper.

5月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その六十八



思 春 期 の 離 愁 の 深 さ 春 休
春 休 み 日 増 し に 見 せ る 兄 貴 面
ピ エ ロ め く 傘 を ど り だ す 春 の 雨
雲 の 峰 地^ほ球^しを 分 母 に 吾 の 小 さ し
現 し 世 の 不 測 の 傾 れ 蜃 気 楼
初 つ ば め 縁 切 り 寺 の 縁 結 び

耐 へ て な ほ フ オ ル テ の 雨 の 余 花 白 し
梅小路公園吟行

雨 傘 の 一 つ を 畳 む 花 の 女
鈍 色 に 空 を 閉 め た る さ く ら 冷 え
白 鳩 の 妓 女 め く 花 の 八 条 第
雨 つ ぶ は 夢 の 万 朶 へ 花 の 下

俳句界

春 宵 の 舩 ひ を 解 く 月 の 船
舩 を 挿 す 安 土 城 址 の 照 り 翳 り
春 月 の 淡 き 誘 ひ 浜 の 宿

塩貝 朱千



雛

指ほどの雛ぼんぼりの灯らぬまま
 雛さまの御手に叶ひしお茶道具
 雛百年十二単衣の色褪せず
 左大臣の髭は真白に百年雛
 お内裏さま待ちくたびれし駕籠牛車

英華採集

ゆびきりといふ口封じ女正月

鎌倉 畑 佳与

歳晚、年末年始、そして松の内と慌ただしく過ぎてゆく主婦の仕事、正月十五日の女正月の日は女性の休養の日である。満を持して気の合った女友達が寄り合い寛ぐ一日を過ごすことになるのだが、些か羽目を外したか「言わずもがな」の言葉を口走ったのであるうか？そこで、女の伝家の宝刀「指切り」を抜くことになる。「指切り」と「女正月」の思わぬ取合せが響き合うことになる。

雨の字に雫が四つ雨水かな

福山 北村 梢

●雨の一字を含むものに「空知らぬ雨」「七つ下がり雨」「遣らずの雨」「私雨」：等面白い言葉がある。作者は、「雨」の漢字の「四つの点」に注目しこれを雫と見るも「雫」にも点が四つある。この四つの点を「恵みの雨」と捉えたのであるう。又、「雨」に係わる言葉が出来ることになり季語の「雨水」に繋がってゆくのである。言葉が醸し出す面白さと季語との結び付けに思わぬ妙がある。

早春の句暦捲る音めくる

京都 大谷 茂 樹

毎日毎日を楽しむかのように俳句の日捲りカレンダーを捲っている人が多い筈で、掲句は皆さんの代表として取り上げた。名のみ春は、よく聞かれる言葉で春とは言えまだ薄ら寒い日、暦の上でも春を感じたいもので下五の「音めくる」にその思いが言い尽くされている。一日でも早い本格的な春の訪れを作者と共に待つ事にしよう。

桐の花 沼田巴字

隠国となりし一村桐の花
鉄線花一番咲きは臍たけて
山茱萸のあたり一带深海めき
花水木真白は死ぬる装ひぞ
翳と翳うち重なりぬ花辛夷

鷺掴み 丸井巴水

一言で凍て解く森の一軒家
片隅で決まる婚約梅に荅
一錠に一パイの水春陽よせ
パソコンに詰まる病歴山笑ひ
鷺掴む鉄屑こぼれ春の天

梅八分 植村蘇星

令和なる昭和一桁梅八分
葉脈の太り洋々木の芽晴れ
硬直の身体をほぐす木の芽風
早やばやと類が類呼ぶ卒業子
首振りつもこもこ擡ぎ地虫出づ

春しぐれ 北川孝子

春しぐれ口笛の行く歩道橋
ゆるやかに波たたみ来る春しぐれ
かす汁の一椀に夜の和みけり
お人好しと言はれて老いし大みどり
風みどり分相応の暮しぶり

裸木 直江裕子

なりゆきや目に物言はず大マスク
裸木の先の先まで力もつ
冬の日を穂先にのせて仮名崩す
てのひらの渴きに苺お好きですか
一月の水の感触いつも父

夜の梅 伊藤希眸

晴れわたる微動だもなき白梅の空
凍瀧の融ける日の山重かりし
沼水の地震にふくらむ土堤若葉
疎^{ちぢ}抜きの菜よさだめとは言ひながら
夜の梅なんにもなくて嬰のこゑ

氷割る 高木晶子

十年を問へば椿の色持たず
睫毛まで雪をまとうて厄落し
氷割る明日の音を聞きたくて
税務署員いきいき動く恵方かな
童謡も半ば忘れて春の川

トラック野郎 奥田筆子

北風吹くや夜のコロッセオ咆哮す
アマゾンの密貿易の冬いちご
啓蟄や回転軸の一妄語
トラック野郎春あかときに通曉す
葉牡丹の人がはりして黄十字花

神麓集

リラの雨

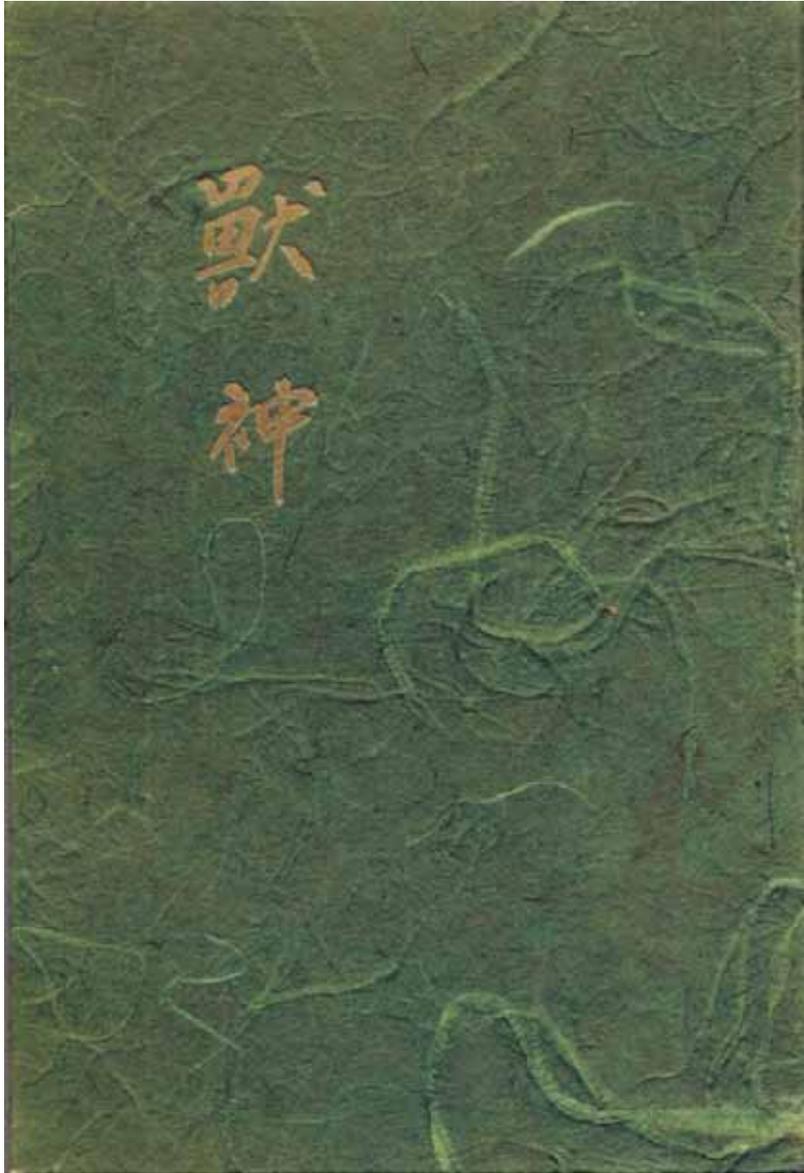
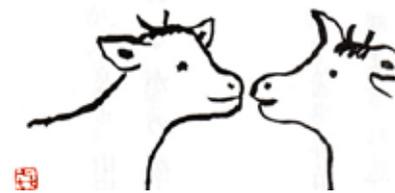
井上菜摘子

ふところの螢ねむらせ眠りにつく
麦秋のどこにも触れぬ手でありし
何追うてゐたのか合歡の木も睡り
ふだらくへ母のほうたる放ちけり
月曜はリラの雨降るわたし時間

おもちゃ箱

村田あを衣

母の日のおもちや箱より糸電話
母の日ははの抽斗ちちがゐる
頬杖へ声うるませる春の鳩
春うれひかぶれば馴染む狐面
ふらここを濯ぎこぎ決める旅立つ日





京鹿子集

豊田都峰選

露のたう一揆伝へる童歌

早春の森の吐息のちぎれ雲

春夕焼おはじき飛びに子等帰る

紅梅のいちりん背中押されけり

春寒し命の電話こつと切れ

仕事始め先づは金魚におめでたう

グラビアの海老蔵と酌む年の酒

背凭れの高き揺り椅子女正月

新春の点袋より五七五

「通りゃんせ」天神さんの梅強気

京田 山中志津子

城陽 鷺山 珀眉

天神のパワースポット春動く
桜東風この惑星を浄化せよ

アンティークのランプをみがく雪もよひ

草餅のいろ野に返す漫ろ雨

春の燈や封緘の糊乾くまで

しづけさの時を束ねて冬銀河

右脳とは放埒三昧なる落葉

冬木立互ひの空を争はず

どこからも遠いところにかいつぶり

暦果つ夜を深くして外待雨

福山 亀井 福恵

露の薑噛んで今知る父の苦言

早春や光つしばむ群雀

公魚や山河愛する百姓女

たんぽぽや過疎にぬくみの灯の点る

二月尽時経ることの早すぎる

思ひ出はともしびのいろ雪の夜

言ひ訳も弁解もせず冬の草

春風の割り込んで来る立ち話

もろもろの芽吹きをのりや光満つ

つづやきの句の育ちをり春の雲

孤独てふ贅のありけり梅一輪

朗々と竹哭く夜の寒句吟

風花や水に溶ければ水の綺羅

爪研いで恋盗る子とる雪女

初雪や踏んで地球の韻を聴く

早梅へ天つ光を零しをり

春財布ピカッと五円玉光る

寒明の光を掬ふ如露の水

光はらむ如月の雲影もたず

ちびつこの意気込む声や寒稽古

福知山 西村 白杼

福山 石原 孝人

櫓のきしみ湖の鹿を深くせり
谿の音丸呑みにして雪解川

堰越える水の二拍子早春賦

早春や音なき雨の雑木山

夫婦みな二句一章や初鏡



ゆびきりといふ口封じ女正月

京鹿子の百年祝ふお正月

朝刊に曜日たしかむ一月尽

夫も私もコロナコロナのお正月

雨の字に雫が四つ雨水かな

早春の堀の水照るなまこ壁

一期一会のごと早春の風と逢ふ

綿菓子のおふはり三月やつて来た

早春の句暦捲る音めくる

はだれ雪払ひ落として摘む春菜

春遅々と丹波路は雲ひとつなし

早春の声を紡げる水車小屋

鎌倉 畑 佳与

福山 北村 梢

京都 大谷 茂樹